



バルト神学とオランダ改革派教会

石原知弘

危機と再建の時代の神学者たち【大森講座33】

8月23日発売

◆四六判・118頁・本体1100円

彼らはバルトをどう読んだのか。

オランダほどバルト神学を積極的に受容した国はなく、オランダほどバルト神学を厳しく批判した国もないと言われる。バルト神学が二〇世紀の教会にもたらした影響の象徴的な事例として、その歴史的経緯と神学的・教会的意味を考察する。

日本ではほとんど知られていないオランダ改革派教会の神学小史としても貴重な情報を提供してくれる。

著者いしはら・ともひろ氏は、1973年、岡山市に生まれる。一橋大学社会学部、神戸改革派神学校卒業。オランダ・アペルドールン神学大学にて神学修士号取得。日本キリスト改革派北神戸キリスト伝道所、園田教会を経て、2019年より東京恩寵教会牧師。神戸改革派神学校非常勤講師（組織神学）。著書『オランダ改革派神学を旅する』（2017年）、共訳書マクグラス『キリスト教神学資料集上』（2007年）

【目次より】

- 第一章 神学者バルトの登場と二つのオランダ改革派教会 一九一〇年代～一九二〇年代
 - 1 総会系オランダ改革派教会の時代とバルトの登場
 - 2 国教会系オランダ改革派教会におけるバルト神学の受容
 - 第二章 バルト神学と危機の時代のオランダ改革派教会 一九三〇年～一九四五年
 - 1 ドイツ教会闘争におけるバルトとオランダ改革派教会
 - 2 占領下オランダにおける反ナチ抵抗運動とバルト神学
 - 第三章 バルト神学と再建の時代のオランダ改革派教会 一九四五年～一九六〇年代
 - 1 国教会系オランダ改革派教会におけるバルト神学の支配
 - 2 総会系オランダ改革派教会におけるバルト神学の勝利
 - 第四章 オランダ改革派神学の意義
- おわりに 「バルト」神学と「オランダ改革派」教会

ゴスペルハーモニー

君に贈る5つの話

宮平望 著



◆B6判・118頁・本体1200円

ミヤヒラ教授が学生たちに語った、とっておきのキリスト教ストーリー。

ドレミの謎、三位一体の数学、第一次大戦の休戦秘話、名詩「足跡」の福音、「グッドバイ」の神学的起源などなど、ハッとさせられる発見に富む。牧師たちの説教のヒントも満載。

宮平望（みやひら・のぞむ）氏は1966年生まれ。同志社大学、ハーバード大学、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学などで学ぶ。現在、西南学院大学国際文化学部教授、神学博士。著書に、『現代アメリカ神学思想』、『神の和の神学入門』、『新約注解「私訳と解説」シリーズ全12冊』、『ジョン・マクマレー研究』、『デイスニーランド研究』などがある。詳しくは、<https://miyahiranozomuhome.wixsite.com/my-site>を参照。

▼同じ著者の人気既刊書

ゴスペルエッセンス

◆B6判・112頁・本体950円

ゴスペルフォーラム

◆B6判・132頁・本体1100円

ゴスペルスピリット

◆B6判・116頁・本体1100円

● 8月の重版案内

忽ち重版！ 夜と霧の明け渡る日に

未公表書簡、草稿、講演

◆四六判・本体2400円

ヴィクトール・フランクル／赤坂桃子訳



強制収容所からの解放と帰郷という、フランクルの人生において最も重要な時期の伝記的な事実と、当時の中心思想の一端を、未公開書簡と文書を用いて再構成する。名著『夜と霧』誕生の背後にあった個人史と時代史の二つの文脈が、初めて明確に交差する。編者は、膨大なフランクル文献に最も詳しい、ウィーンのリクトール・フランクル研究所所長アレクサンダー・バティアエニ博士。

在日韓国YMCA編

未完の独立宣言

2・8朝鮮独立宣言から100年

「2・8独立宣言」が東京朝鮮YMCAから発せられ、3・1独立運動の導火線となつてから今年が100年。この宣言の歴史的意義やキリスト教との関係、また日韓の市民たちが今後そこから何を学ぶべきかをめぐり、多くの論者が多面的に考究する。

◆四六判・予価2500円

ウイリアム・キヤヴァノー著／東方敬信・田上雅徳訳 政治神学的想像力

〔仮題〕

国家・市民社会・グローバルゼーションを支配する規律化された想像力を別括し、もう一つの想像力をキリスト教のストーリーから回復しようとする試み。現代世界を席卷するネオリベラリズムにキリスト教はいかに対抗するのか。その可能性を探る新たな政治神学。

◆四六判・予価2500円

ヴォルフハルト・パネンベルク著／佐々木勝彦訳

組織神学 第1巻

1988年から93年にかけて完成された名著全3巻、待望の邦訳がいよいよスタート。キリスト教の真理要求を保持しつつ、歴史的省察と体系的省察とを絶えず結合し貫徹しようとする批判的・方法的意識に貫かれた叙述。第1巻では真理論と神論を扱ふ。

◆A5判・予価9000円

●7月に出た本と雑誌

アモス書講義

ジャン・カルヴァン／関川泰寛監修・堀江知己訳



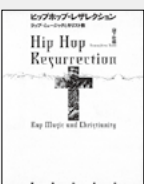
創設間もないジュネーヴ大学で、週3日、隔週で行った講義の記録。ヘブライ語原典を自らラテン語に訳し、入念なパラフレーズを行うスタイル。ライブ感溢れる講義の様子を生き活きと伝える。

◆A5判・本体5000円

ヒップホップ・レザレクション

ラップミュージックとキリスト教

山下壮起



反社会的な音楽文化として非難の対象となつてきたヒップホップは、なぜ繰り返し神や十字架について歌うのか。アメリカ系アメリカ人の宗教史に深く分け入り、その秘めたる宗教性を浮かびあがらせた労作。

◆A5変型・本体3200円

福音と世界

◆税込635円

8月号

現代のパベルの塔——反オリンピック・反万博

寄稿者：有住航、入江公康、酒井隆史、田中東子、塚原東吾、

「取材」いちむらみさこ／マニユエルヤン、石井光太、

内田樹、DyPRIDE、辻学、長谷川修一、堅田香緒里、

松本あずさ、山口政隆、佐藤優

●以前からこの欄でもお知らせしてきた『ヒップホップ・レザレクション——ラップ・ミュージックとキリスト教』（山下壮起著）がようやく刊行となりました。小社の書籍としては異例の、かなり尖ったつくりにならなっています。装釘家の宗利淳一さんとは、「CDやレコードのライナーノーツ（解説の小冊子）みたいにしたいいね」ということで、何度もやりとりを重ねました。そのかいあって、キリスト教書としてだけではなく、音楽本としてもいっさい遜色のないものになったと自負しています。またオビで目をひくのは、『福音と世界』にもインタビューで登場していただいた檀盧影^{たんでいんげい} ディープラップさんの推薦文、「神を求める心の叫びはいっつしか韻詩になった」。作家でありラッパーという檀さんならではのパンチラインです。そのうえで、本書の最大の見所はやはりその内容にあるでしょう。著者はアフリカ系アメリカ人宗教史を背景に、黒人霊歌、ブルース、そしてヒップホップという音楽の系譜を辿ります。そこからみえてくるのは、階級分化し、アンダークラスの若者たちのためにこたえられなくなったキリスト教会の姿。そして、それに代わって救済の在処を示すべく登場したヒップホップの

スベリユアリティ
靈性です。キリスト教会のひとつの限界を、あるいはいまヒップホップという表現に賭けられているものを知るために「耳ヲ貸スベキ」この一冊。ぜひ夏休みのお供にどうぞ！（堀）

●日韓政府間の関係がこれにこじれ、心を痛める報道が続いています。日本政府の貿易上の一連の決定が徴用工訴訟問題への対抗措置であることは明らかです。問題の根源は依然として歴史認識であり、戦後処理であり、戦後賠償です。賠償は外交問題から法的な技術問題まで多面的な要素を孕んで複雑ですが、その解決の成否は、戦時下の犯罪性の大小だけでなく、戦後の当事国の罪責認識や指導者の責任の取り方、自己変革と信頼関係構築への努力の全体にかかっていることは言うまでもありません。ナチの巨大な犯罪を背負った東西両ドイツの補償のあり方も一筋縄ではいかないものであったことが知られています。では、日本の韓国に対する罪責認識や信頼構築への努力はどうだったのでしょうか。この問題の解決は、日本の植民地統治と戦争政策によって苦難を負った一人一人の歴史に目をとめ、その重さを受けとめること、そして個人請求権を認めて誠実に対処すること、そこにしかないと思います。（小林）

福音と世界

2019年
9

A5判・80頁・定価635円・送料70円
年間予約購読料（送料共）8460円

特集・沖繩（じゅう）問いかけ

植民地統治性から

沖繩／自らを凝視するために——森啓輔

「外国人」問題と沖繩社会

——土井智義

鎮庄と回帰——反革命としての現在

——大畑 凜

沖繩女性をめぐる文化表象の政治学——成定洋子

暴力によらない抵抗の回路を開く——目取真後

『眼の奥の森』をめぐる——村上陽子

【書評】守中高明『他力の哲学』……白石嘉治

【報告】WCC・CCAエキユメニカル国際会議……藤原佐和子

【新連載】

◆教父学入門 1……土井健司

【好評連載より】

◆バビロンの路上で 6……マニエル・ヤン

◆神の酒 6……石井光太

◆新約釈義 テトス書 6……辻 学

◆遺跡が語る聖書の世界 10……長谷川修一

◆福音の地下水脈 22……町田 康

◆レヴィナスの時間論 53……内田 樹